

産育全書

嘉永 3[1850]刊 12 巻 水原三折著

当時の解剖学、妊娠の診断や、出産法、投薬などが総合的に網羅されている。全体が内篇・外篇・附録の三部から成り、内篇では三折の発明した産科種器の用法を論じている。



水原三折【みずはら・さんせつ】：1782（天明 2）－1864（元治 1）

江戸後期の産科医。本名は最上、名は義博。近江国（滋賀県）現在の近江八幡市池田町生まれ。20 歳の時に京都に行き、本道（内科）を宇津木昆台に、産術を奥劣斎に、蘭学を海上随鷗に学び、十年後に帰郷して産科を開業した。その間、難産でも母子ともに救える和製産科鉗子ともいべき探額器を発明した。これは長須鯨の鬚で円紐を作り、温めると軟化し冷えると硬化する性質を利用し、その円紐を産道から挿入して胎児の額下にひっかけて娩出する術式である。天保 6(1835)年京都に移り、探額術を門弟に伝授した。墓は京都市下京区の正行院にある。

<著作>『産科探額図訣』2 巻、『産育全書』12 巻

出典：朝日日本歴史人物事典：（株）朝日新聞出版

：日本人名大辞典 講談社

～江戸時代のお産について～

【正常胎位の発見】

古来から、東洋でも西洋でも、胎児は子宮内では頭部を上にし、臀部を下に位置し、分娩が始まるとすぐ転倒（子返り）して頭部を下にして生まれてくると信じられてきた。しかし江戸時代中期、これが誤りであることを賀川玄悦（^{かがわけんえつ}1700年生～1777年没）はそれまでの経験から発見した。玄悦は『産論』巻一でこう述べている。「弥月（十カ月末）の頃の胎児の大きさはどのくらいか。子宮の広さはどのくらいか。そんなときに胎児が回転したとしたら、お腹が破裂してしまうではないか。そう考えれば、臨月になって子返りするという説がいかに間違っているかわかるだろう」。つまり、これが背面倒首説—正常胎位の発見である。内容としては、胎児は五カ月以後、頭を下方に、背を前面に向けて位置する状態が、正常胎位であると説いている。正常胎位は、現在では常識であるが、当時の産科の医師ですらこの発見は驚天動地の見解であった。また、西洋でもイギリス人ウィリアム・スメリー（William Smellie）は著書 “A Sett of Anatomical Tables with Explanations and an Abridgment of the Practice of Midwifery ” London 1754.で、西洋産科書ではじめて正常胎位を説いている。つまり、東洋と西洋ではほぼ同年代に正常胎位を発見していたことがわかる。

【回生術の実施】

回生術とは出産により死に瀕した母体の生命を回生させる術式である。これにより、胎児は無理だが、母体の生命を救うことができるようになった。賀川玄悦から連なる賀川一門の著書から考えると回生術とは「死胎児に対し穿顱術（頭蓋骨に孔をあける手術）・^{さいとう}砕頭術（頭蓋骨を打ちくだく手術）^{さいたい}截胎術（胎児の体を切り離す手術）をおこなって娩出させ母体の生命を救う手術法である」と定義づけることが

できる。賀川流の場合、鉄鉤一本をもって回生術を行う。これは非常に熟練を要し、そのため門弟中でも特に秀でた者しか許されず、賀川流にとっては一子相伝ともいうべき手術であった。江戸時代には出産そのものによる母児死亡が多くあり、この回生術によって母体の生命を救う方法に成功したことは、ひとつの進歩と考えることができる。

【健全な出産と水原三折の発明】

玄悦の産科理論や回生術はひろく普及するにつれ次第に弊害も目立つようになってきた。なかでも鉤によって胎児に傷つくことが最大の弱点であった。そこで、賀川家末孫や多くの門弟たち、また賀川流門以外の医師も、鉤を使わず、母体と胎児を傷つけないためのいろいろな器具の考案に勤しんだ。その一人がくじらひげ鯨鬚製の「探額器」を完成させたみずはらさんせつ水原三折（1782年生～1864年没）である。水原三折は近江国、現在の滋賀県に生まれた。二十歳のときに京都に行き本堂（内科）をうつつき宇津木こんだい昆台に、産術を奥劣齋に、蘭学をうみがみすいほう海上随鷗に学び、十年後、一旦帰郷して二十年間産科を開業した。その間、母子ともに健やかな出産を実現するための器具を考えて、鯨鬚製の「探額器」を完成させた。この器具の使用方法は、鯨鬚製のすいりゅう睡龍器の両端にある小孔に長さ一メートルの鯨鬚製で作った円い紐を通じて、これで先端に輪を作り産道内に挿入して胎児の顎に引っ掛ける。うまくかかったら睡龍器を取り去って、だつしゅ奪珠器に紐の端をとりつけた後、牽引して胎児が娩出する。生きている胎児はもちろん死胎児であっても傷つけることはない。鯨鬚の温めると軟化し、冷えると硬化する性質を利用した画期的な器具であった。三折はこのほかにも十種に近い産科器具を発明して、1849年（嘉永二年）『醇生庵産育全書』全12巻を刊行した。これは当時の解剖学、産科学の知識と、読みうる限りの西洋医書を参考に著作した水原三折のひっせい畢生の大著である。

出典：お産の歴史：縄文時代から現代まで 杉立義一著 集英社 2002年